

2020 年(令和 2 年) 1 月 17 日実施

学生とシニアの対話八戸工業大学 2019 年度 in 六ヶ所村

報告書

世話役・報告書まとめ 矢野歳和



I. 概要

八戸工業大学の学生とシニアの対話会が 2020 年（令和 2 年）1 月 17 日（金）に六ヶ所村にて実施された。この対話会は第 14 回目となる。参加者は日本原子力学会シニアネットワーク（SNW）連絡会、SNW 東北のシニアのメンバー、および現地六ヶ所村で活躍中の同大学 OB と現地企業の経営者や担当者を加えて開催された。テーマは昨年と同じく「原子力の仕事のこれまでとこれから」とし、SNW 東北の高橋實氏の基調講演のあと対話会が実施された。

II. プログラム

（敬称略）

1. 日時 令和 2 年（2020 年）1 月 16 日（木）～ 1 月 17 日（金）
2. 場所 八戸 及び 六ヶ所村文化交流プラザ・スワニー(青森県上北郡六ヶ所村大字尾駸字野附 1 番地 8)

3. 参加者 計 56 名 内訳 八戸工業大学 学生 26 名、教職員 5 名、OB／企業 14 名、
シニアネットワーク (SNW) 等 11 名
- ・八戸工業大学 教職員 5 名
世話役 佐藤学教授 (工学部機械工学科)
石山俊彦教授 (工学部電気電子工学科)
四竈樹男教授 (地域産業総合研究所所長)
齊藤克治主査 (社会連携学術推進室)
沼田聡穂子様 (同上)
 - ・学生 26 名 内訳 工学部 機械工学科 3 年 9 名、4 年 6 名
電気電子工学科 3 年 2 名、4 年 1 名
生命環境科学科 3 年 3 名、4 年 4 名
感性デザイン学部 創生デザイン学科 4 年 1 名
 - ・OB／企業 14 名 日本原燃(株)、日本原燃分析(株)、(株)青森原燃テクノロジーセンター、
(株)ジェイテック、青森日揮プランテック(株)
 - ・SNW 等 11 名 (SNW 5 名 SNW 東北 5 名 オブザーバー 1 名)
4. 対話グループ 1 G (石塚隆雄 阿部勝憲) 2 G (大塔容弘 工藤昭雄)
3 G (西郷正雄 高橋實) 4 G (三谷信次 馬場礎) 5 G (若杉和彦 矢野歳和)
瀧上浩幸 2G (電機工業会) オブザーバー、アンダーラインは SNW 東北
5. スケジュール
- 1 月 16 日 (木) 八戸 情報交換会
1 月 17 日 (金)
- 8:00 大学へ集合 六ヶ所村へ移動
10:00 青森県量子科学センター (六ヶ所) 到着 施設見学 見学後 スワニーへ移動
11:10 スワニー (六ヶ所・会場) 到着
11:35 昼食 (昼食をとりながらグループ対話 40 分程度)
12:30 対話会開始 (基調講演 40 分、ディスカッション 110 分、発表 10 分程度)
基調講演 高橋實「原子力の仕事のこれまでとこれから」
15:30 終了予定 スワニーから八戸駅へ移動
17:30 八戸駅着 (解散)

Ⅲ. 対話会

1. 開会の挨拶 佐藤学教授

この対話会は八戸工大の原子力関連講義の一環であり、経済産業省支援による「原子力の安全性向上を担う人材の育成事業」のもとで行われた。学生は講義に加えて六ヶ所、大間、東通など下北地区で研修やインターンシップを行い、これらを含めて人材育成に関する教育が行われた。今回の対話会もそのプログラムに含まれ重要な位置を占めていると述べられた。

2. 基調講演 高橋實

タイトル「原子力の仕事のこれまでとこれから」

プロジェクターで映した PDF 原稿を事前にプリントして配布して講演した。

内容は ①エネルギー選択の考え方 ②これからの原子力の仕事 ③学生の皆さんに期待することの3部構成である。

エネルギー選択の考え方では3E+Sについて基本的な考え方と具体的な事例を挙げ、安定供給・安全保障、環境影響、経済性と原子力の安全性について述べた。また今後のエネルギーではこれらの観点からすべてにおいて満点のエネルギー源や電源はなく、適切に組み合わせることで使うこと、原子力（核燃料サイクルも含め）はその中核となり、原子力の新增設は不可避であることを説明した。第5次エネルギー基本計画では原子力依存度を可能な限り低減し非連続的な技術革新を推進するとあるが、エネルギー開発のタイムスパンが長いことから現実性に乏しいことを指摘した。

これからの原子力の仕事は青森県内に現存する原子燃料サイクルの各施設、東通および大間の原子力発電所などの再稼働や建設なども進行中で、また核融合の研究開発拠点もあり、福島においても廃炉の技術開発や工事が進行し、炉の新設、高レベル廃棄物、新型炉開発など短中期的および中長期的な仕事が継続することを述べた。

最後に学生諸君に自己研鑽と心構えを新たに、世界と日本の将来を真摯に捉えてエネルギーの中核を担って頂くようにエールを送った。

3. グループディスカッション

主題「原子力の仕事のこれまでとこれから」を5グループで実施した。シニアの各グループの担当を以下に示す。

- | | | | |
|-----|------|-------------|--------------------|
| 1 G | 石塚隆雄 | <u>阿部勝憲</u> | (アンダーラインは SNW 東北) |
| 2 G | 大塔容弘 | <u>工藤昭雄</u> | オブザーバー 瀧上浩幸(電機工業会) |
| 3 G | 西郷正雄 | <u>高橋實</u> | |
| 4 G | 三谷信次 | <u>馬場礎</u> | |
| 5 G | 若杉和彦 | <u>矢野歳和</u> | |



3. 1 第1G

(1) 対話概要 1G 石塚隆雄

参加者 合計10名

学生：機械工学科在籍の4年生1名、3年生4名の合計5名。研究室の専門基礎は熱力学1名、材料力学2名、計算力学1名、機械材料1名。全員が機械工学科なので、揃った専門学科所属と言える。4年生は原子力関係の会社に就職が決定済。

OB・企業：八戸工大の卒業生が在籍する六ヶ所近辺の会社の方3名（日本原燃、日本原燃分析、ジェイテック社から各1名）で比較的若い人から超ベテランまで（企業経営者）（社会人と称す）。

シニア：石塚隆雄 阿部勝憲

対話概要

基調講演と各グループのテーマは共通で「原子力の仕事のこれまでとこれから」であった。以下に対話会の内容を記す。

最初に学生の役割分担を決めてスタートした（後でグループ毎の発表は代表グループのみとの事）。対話の途中に昼食、基調講演が入った。学生及びシニアの自己紹介を行い、お互いを知った。対話会では事前にシニアに各Grから質問が出されていた。

第1Gに対しての質問は

“1. 原子力の現場では様々な基準値に基づいて作業者の安全や周辺環境への影響が定量的に評価されていると思いますが、実際に基準値とは具体的にはどのような論理・過程を経て策定されるものなのでしょうか（許容されるリスクの上限、機械工学における安全率のような係数があるのか）。”

“2. 皆様が就職をする際に今勤務する（元勤務していた）会社を選択した理由、もしくはきっかけを教えて欲しい。”

“3. より良い原子力にしていくために必要なこと、維持していかなければならない事は何か、もしくはきっかけを教えて欲しい。”

シニア側から上記3つの質問に対する回答・コメントを配布して説明しながら対話した。

質問1に関しては、放射線の被ばく限度は国際的には国際放射線防護委員会（ICRP）で規定されており職業人の場合には5年間で100mSv、特定の1年間で50mSvとしており、一般公衆の場合には1 mSv/年で、女子は別規定。日本はICRPと同じ扱いであることを説明。但し、緊急時の被ばくは別規定であることが説明された。社会人の方からは放射線管理として作業現場での具体的な事例が紹介された。作業者があびる放射線量の管理として、線量計を付けての作業、手帳を作り経歴の記録、年1回の健康診断受診、放射線教育の受講等。放射線被ばくを減らすには被ばく低減三原則（線源から離れる、遮蔽物を置く、被ばく時間を短く）について紹介された。被ばく管理は個人管理なので、作業者数を増やし、交替作業などで対応することもあるとの事。又、放射線被ばくに関しての単位（ベクレル、シーベルト他）の勉強も必要との事。放射線防護に関してはインターネットを使えば情報を取れる事コメントした。例えば被ばく限度にかんしては“放射線 被曝”でも多くの情報が得られることが紹介された。

質問2は就職活動時の会社選定に関することで、3年生はこれからの就職活動で非常に興味を持つ事柄である。先ず会社選定では自分が将来何をやりたいのか（機器設計、研究、エンジニアリング、セールスエンジニア、物作り等）、自分の生きがいを感じる会社を候補に挙げる。企業ではチームプレイが重要で強調性のある人材が求められること、勤務地の希望があれば念頭に入れて置くこと等が説明された。社会人から各人が現在の会社を選定した際の経験を紹介された。日本にはエネルギーや資源がないので、エネルギー源となる原子力関係の仕事を選定したとの紹介あり。

質問3はより良い原子力の為に必要なことである。これに対しては原子力発電所では尚一層の安心・安全な運転実績を示し、世の中に原子力発電が信頼されることが重要であること、過渡運転状態を早期に検知し、過渡運転を事故に至らないように日常の現場点検作業、予防保全行動が重要な事が説明された。秘密無しの透明性も重要。例えば、社会人からの紹介として、部品が焦げた事例で火災の可能性があるが消火された。この場合には火災には至らなかったがホームページに掲載しニュースになり新聞でも報道された。事故では無いが小さなトラブルでも公開することも大事。周辺の人々に理解を広める方法として社会人から活動事例が示された。ホームページを使つての電子媒体や紙媒体によるもの、近隣の全戸訪問、青森の産業支援、県との安全協定と説明会開催等、これらの努力は地道な事だが効果が期待される。

質問以外の事柄として、幾つかの事が紹介された。

仕事への取り組み姿勢に関して社会人からの紹介：現場作業のレベルを上げ、成果を出すには良い設備、そのメンテナンスを行う良い人材、良い計測器（温度・圧力等）とそれを扱える良い人材が必要。時間が経過すると能力の停滞が起こるので、訓練が重要であり、そのためには訓練設備が必要になる。これを怠ると他社との競争に負ける。常に新しい技術導入を図るのが重要。今後の物作りには、物を作ってチェックするのは資金がかかり、バーチャルチェックするのが資金の節約になり、重要となるとの意見が紹介された（経営者のコメントは重きがある）。

仕事のやりがいに関して；仕事を行う時にやりがい、満足感を目標にするのではなく、与えられた業務に努力に努力を重ねて仕事を終えた時に達成感・満足感はついてくるとの紹介あり。自分が自信を持って仕事をする事が相手の信頼を得ることになり、決して手抜きをしないことが大事とのコメント。

学生から学生時代に努力しておくべきことは何かとの質問：社会人、シニアから共通して言われたことは英語力を磨くこと、英語を読む、聞く、書くことは心がけ次第で学ぶ機会を多く取り、お金を掛けなくてもできるとのコメント有。又自分の専門性を深めて置くこと、機械系の学生は電気の事も学んでおく役立つ等のコメント有。

今回の対話会では学生からの3件の事前質問に答えることから開始し、途中八戸工大の卒業生が在籍する六ヶ所付近の企業等からの社会人が加わり、シニアと共に対話会を進めた。社会人の具体的な現場作業経験に基づくご意見は貴重であった。

（2）感想1G 石塚隆雄

八戸工大での対話会には一昨年に続いて2年ぶりの参加でした。対話会のテーマは「原子

力の仕事のこれまでとこれから」という具体的で学生の皆様には非常に興味のあるものでした。全グループ共通のテーマは初めての経験でしたが、非常に良い企画だと考えます。対話会の発表を代表1グループにしたのは、対話会時間を多く確保するには良い試みであったと考えます。今回初めての経験ですが八戸工大の卒業生、卒業生が活躍する六ヶ所近隣の会社の方の参加では、シニア以外から現場の最新の状況が紹介され良かった。特に、皆様燃料サイクル施設の現場で活躍されている方が多く、仕事現場での作業状況が具体的に紹介され、学生も興味深く真剣な態度であったのは感銘を受けました。近隣会社の方を含めた対話会のこの趣向は今後共続けられることを期待します。今回全グループに事前に質問が寄せられ、それを基に対話会ができました。学生がこれらの質問を考えるうえで事前に勉強したお陰で、学生の問題意識が高く、且つ担当した1Gは全員が機械工学科の学生であったことも対話会がスムーズに行えた一因と考えます。有意義な対話会に参加でき、参加者、準備された大学の先生方やシニアの方々に感謝いたします。

(3) 感想1G 阿部勝憲

昼食前後に自己紹介などゆっくり懇談し、講演により原子力の役割をあらためて確認してから、「原子力の仕事のこれまでとこれから」というテーマで対話に臨んだのは良かったと思います。対話グループでは県内出身者が多く研修やインターンシップで原子力現場を見聞きしていることから、原子力の仕事や将来をこれからの進路や地元の問題としてとらえていました。準備した質問に関するやり取りに続いて、OBの方の現場の話しや企業シニアの方の話しには次々と質問があり、やり取りが活発で真剣でした。地元企業に就職が決まった学生の志望動機は自分の専門資格を運転や保守で発揮したいと明確であり、これから就職活動をする学生諸君も自分の仕事として現場の放射線管理などに関心を持っているようで感心しました。原子力のより良き将来について、シニアや社会人に続き学生諸君の意見も聞けました。地元の信頼や日々の安心をという言葉が印象に残りました。

原子力の将来に関しては、講演にありましたが青森県では再処理稼働、MOX燃料工場、発電所建設など中核事業が並んでおり、さらに核融合開発など最先端の研究が進んでいます。今回は放射線の医療や分析応用などの研究施設についても見学でき、地域が原子力の未来を牽引することを実感できました。学生諸君の活躍を願っております。ご尽力いただいた佐藤先生はじめ大学の教職員の方々や地元企業やセンターの関係者に感謝します。

3. 2 第2G

(1) 対話概要2G 工藤昭雄

参加者 合計10名

学生： 5名（機械工学科3年3名、電気電子工学科3年1名、4年1名）

OB・企業：2名 日本原燃、日本原燃分析から各1名

シニア： 2名 大塔容弘 工藤昭雄

オブザーバー1名 瀧上浩幸(電機工業会)

概要

・対話進行役として機械工学科3年の学生にお願いし、対話はまず学生メンバーから順にシニアに対する質問をする形式で開始した。

・主たる対話内容（質問、回答、コメント等）は以下の通り。

- ① 石油等化石燃料の輸入が停止したら、原発運転再開するよりないと思うが、すぐに再開できるのか？

シニア見解：新規制基準に合格したが運転再開に至ってないのは、政策的に再開を早めることは可能と思うが、準備期間も必要ですぐ立ち上げる事は難しいと思う。

- ② 現在の炉より優れた新しい炉が開発されたらすぐリプレースできるか？

シニア見解：不可能と思う。原子炉の建設は、敷地の確保から運転開始まで 20～30 年かかる。従って原子力発電の推進は長期的観点で進める必要がある。新型炉の開発にも数 10 年が必要。既設炉を大事に長く使う必要がある。

- ③ 原発による発電コストは安いと言われているが、事故対応費用を考えると安くないのではないのか？

シニア見解：事故対策費を含めても安いと言える。オーダー計算をしてみよう。

100 万 kW の原発 50 基が年間 300 日運転されている国で、50 年に一度シビアアクシデント（高めの設定）が発生し、対策に 10 兆円かかったとする。50 年間の総発電量は 180 兆 kWh であるので、発電コスト押上効果は $10/180=0.056\text{¥/kWh}$ で、対策に 20 兆円かかっても 0.111¥/kWh にすぎない。

- ④ 原子力発電を維持する為には担う人材の育成が欠かせないと思うが、その為にはどうすべきか？

シニア見解：大学等の教育、研究機関、産業界による育成は勿論大事だが、社会全体の啓蒙が必要で、中学、高校から放射線、原子力の教育が不可欠と考える。SNW でもこれから教師になる人を養成する教育系大学の学生との対話を重視している。

- ⑤ 我が国のエネルギー基本計画では、2030 年における原子力の発電割合を 20～22%としているが、本当に可能なのだろうか？

シニア見解：高橋さんの講演にあったように、プラント寿命 40 年では全く不可能。最低 60 年への運転延長、建設中炉の早期完成等あらゆる手を打つ必要がある。

この間、六ヶ所で働いている OB と学生に以下の質疑、応答があった。

- ⑥ 入社後頑張って、中堅になったら仕事は楽になるか？寮生活で困ったことはなかったか？

OB の回答：期待されるレベルも徐々に上がってきて、ずっと大変だった。簡単に楽にはならない。寮生活で特に困ったことはない。（やや厳しい対応）

その他の質疑、応答等

- ⑦ 放射性廃棄物の最終処分場は見つかるのだろうか？

シニア見解：高レベル放射性の最終処分場に名乗りをあげる自治体は多分出て来ない可能性がある。国がもっと前面に出て、受け入れ自治体が感謝され、且つ経済的に支援を受けられ、意志表示できる環境を整える必要がある。

- ⑧ 最後にシニア側から南海トラフ地震に伴う大津波で太平洋側の発電所（火力）が全てダウンした場合、ブラックアウトを防止する為には、柏崎等日本海側の原発の早期再稼働を国全体として急ぐ必要があることを指摘し、対話会を終了した。

(2) 感想 2G 工藤昭雄

- ・全体の感じとしては、参加学生もかなりの勉強をしてきているようで、対話自体はスムーズに出来たと思う。
- ・しかし学生側からの質問に対し、シニアが見解を述べたことで、一件終了となる事が多く、若干物足りなかった点もある。
- ・六ヶ所村への移動に時間を取られ、対話時間が短くなってしまう。六ヶ所でやる場合、宿泊を六ヶ所にしたら、もう少し時間にゆとりがある対話会に出来るのではないかな？
- ・六ヶ所村地区で働いている先輩方の出席は対話会の目玉でもあるのだろうが、昨年同様、学生達の多少甘えた質問に対し、先輩達が厳し目の回答をしているのが面白かった。(これで良いと思うが)
- ・対話会後の学生発表はシニアにとって成果を推し量る目安になるので、各グループから聞きたかったが、時間制約の為か、1つのグループしか聞けず残念だった。
- ・六ヶ所村等を近くに抱える八戸工大独特の対話会方式も定着してきたようで、佐藤先生他のご努力に敬意を表したい。

(3) 感想 2G オブザーバー 瀧上浩幸(電機工業会)

八戸工大生との対話会にオブザーバーとして参加させていただき、ありがとうございます。また対話会のご準備をして頂いた八戸工大の先生方やシニアの方には感謝申し上げます。

これまでオブザーバーとして参加させて頂いた他大学のシニアネットワーク対話会では、各グループを巡回して対話会に参加している学生さんとまんべんなくお話できるようにしてきましたが、これだと一人の学生に対して短い時間しか話ができないところが問題だと感じていました。今回はグループ2に固定して頂いたので、対話会に参加している一部の学生でしたが、じっくりと話しを聞いたことは非常に新鮮な体験となりました。

以下に気が付いたところを記載します。

- ・他大学の学生さんと比較することはよくないことだと思いますが、あえて述べさせて頂くと、八戸工大の学生さんはこれまで対話会にオブザーバー参加させていただいた他大学の学生さんよりも積極的に発言されているところが非常に印象的でした。
- ・2Gでは、学生さんが事前に準備した質問に対してシニアが答えるという形で進められましたが、対話の中で新たな疑問が出るとすぐに質問するなど、真剣さや積極性があり非常に頼もしい学生さん達でした。
- ・4年生は原子力関連への就職内定者ということもあり、関心の高さがうかがえました。これは原子力関連施設が多くある青森県の太平洋側に八戸工大が立地しているということも関連しているのではないかと思います。
- ・また、大学の先輩という身近な存在が原子力関連施設で多く働いていることも、八戸工大生の関心が高い一つの要因ではないかと思いました。
- ・今回、原子力施設に就職した先輩や従業員をまじえて対話会を進められてことは、学生さん達にとって大いに刺激になり、また興味を持たれたと思います。日本電機工業会のような業界団体としては、今回のように若い人材に原子力関連の企業に興味を持って頂けるような取組みは是非とも継続して実施されることを望みたいと思います。

3. 3 第3G

(1) 対話概要 3G 西郷正雄

参加者 学生： 6名（4年2名 3年4名）
原子力関連企業： 3名（株）青森原燃テクノロジーセンター、日本原燃分析（株）、
（株）ジェイテックより各1名
シニア： 2名 西郷正雄 高橋寛

概要

対話グループに原子力関連企業の3名が参加されたので、既に自己紹介は終わっていたが、改めて氏名だけの自己紹介をして、対話会を始めた。その後、各学生の聞きたい内容を順次本人より説明し、シニアがそれに回答することで進めた。質問内容としては、既に配信されているものがあり、それらについては、回答をシニアより配って一部説明を加えた。対話会での回答は次の項目に対してシニアおよび原子力関連企業より説明した。

- (1) 高レベル放射性廃棄物の最終処分地の確保における課題
- (2) 2050年に向けての原発新增設
- (3) 原発の必要性
- (4) 各電力事業者間での電気の融通性（電力網）
- (5) この度の福島事故で発生したフレコンの処分状況
- (6) 再処理工場の竣工への見通し
- (7) 原子力技術者として働くのに当たって、求められる能力

特に、求められる能力に関しては、シニアからの次の要求される能力の説明だけでなく、原子力関連企業の現役の方々より、これから巣立つ学生たちには、コミュニケーション能力が非常に大切であることが付け加えられた。

- (1) 原子力に関わる基礎技術
- (2) 英語についての会話を含む語学能力

日本原燃では、仏語も必要になることがあるとの説明がなされた。

- (3) プレゼンテーション能力

(2) 感想 3G 西郷正雄

久しぶりに八戸工大の学生と対話を行った。以前は3年生がおとなしかったと思うが、今回は必ずしもそうではなかった。3年生にも良く勉強している学生がおり、はきはきと質問をされていたのに驚いた。ただ、全員が対話に参加することを狙って、シニアは学生に話させようとしたが、十分に整理されずに質問をなされた学生がおり、何を質問したいのかを引き出すのに少し苦労した。

全般的には、やはり先生の指導が良くなっているためかと思うが、勉強した後がうかがえ良かったのではないかと思う。しかし、この対話会については意見交換というよりも、シニアや原子力関連企業の方たちの知見や経験を学生に伝える対話会になっており、その点が少し気になる。学生の考えを質問というよりも、このように考えるといった意見を述べる意見交換の場になることができれば、より望ましいと考える。

(3) 感想3G 高橋實

第3班に参加した。学生が6名、事前質問には、西郷さんが回答書を作られ、その趣旨で話をしたが、皆さんそれなりに納得したようだ。日本原燃関係から3名参加され、特に青森テクノロジーセンターの方は経験、知識とも豊かで、かつ地元の事情にも通じ、的確に質問に対応されていた。去年の卒業生もおり、コミュニケーション能力が大事という話は、同世代の人でもあるので説得力があったようだ。放射性廃棄物の最終処分地の問題と処分方法の技術的問題がごっちゃになっている人もおり、対話により理解が進んだと思う。

今後の原子力がどうなるのか心配している学生もおり、なんとかしなければいけないという点で我々と課題を共有できた。八戸工大の佐藤先生をはじめ、関係者の皆さんのご努力に感謝したい。

3. 4 第4G

(1) 対話概要4G 馬場礎

参加者 11名

学生： 5名 工学部生命環境科学科 4年3名（内1名は女子学生）

工学部機械工学科 3年1名

感性デザイン学部創生デザイン学科 4年1名

出身地は青森県3人、岩手県1人、宮城県1人、4年生は地元原子力
関連企業に就職が決定

地元企業：2名 (株)ジェイテック、青森日揮プランテック(株)より各1名

シニア： 2名 三谷信次 馬場礎

対話概要

対話は学生の司会進行で進められ、はじめに学生からの質問に先輩が答える形で進められた。シニアおよび先輩の業務経験について聞かれ、それぞれの業務内容、経験などを紹介した後、具体的に、反原子力の人達との接し方、3.11福島原発事故前後で仕事のやり方に変化があったか、仕事で大ピンチに出会った際の対処法、原子力発電の将来、などについて対話した。

一方、シニアから学生が地元原子力関連企業に就職が決まっている事について、家族や親せきから反対や不安の声は無かったかとの質問が出された。これに対し、ほとんどの学生からそのようなことは無かったとの回答があった。また、学生から社会人としてスタートするに当たっての決意を聞いた。最後に、対話会の感想について学生から述べてもらい、シニア、先輩からいろいろ経験や助言を聞き有意義だったとの感謝の言葉があった。

(2) 感想4G 馬場礎

八戸工大生との対話は10数年ぶり、2回目の参加であるが、いろいろの点で新鮮であった。1点目は、学生が、3年生を含めしっかりと自分の意見を述べていた。2点目は、対話のテーマが「原子力の仕事のこれまでとこれから」であり、4年生全員(4名)が地元の原子力関連企業に就職が決まっており、原子力シニアの現役時代の経験や現在現役の先輩の話を聴けた事は学生にとって、大変役に立ったと思う。3点目は、学生と我々シニ

アとの間に現役の先輩が入ることで、ジェネレーション・ギャップが薄まり、三つの世代、時代の対話ができ、更に有意義な対話になったと思う。

(3) 感想 4 G 三谷信次

八戸工大での対話会参加は一昨年以来である。対話会それ自体は、八戸工大の構内(八戸市)ではなく再処理施設に近い六ヶ所村の施設スワニーで開催された。何故六ヶ所村まで学生もシニアも一緒に出向いて対話をしたかという理由がわかった。それは地元六ヶ所の日本原燃の協力会社の幹部達を交えて行われたからである。基調講演も地元東北 SNW 高橋實氏による「原子力の仕事のこれまでとこれから」と題して講演され、最後に学生の皆さんに期待することという 1 枚のスライドで締めくくられた。

対話は学生がファシリテータになり、各学生から出てくる質問は「企業に入ったらどのような事をするのか」とか「会社に入って一番苦しかった事は何か?」といった質疑応答が多かった。対話の進行は殆ど学生達のペースで進められた。一昔前のシニアの話を聞くことが多かったころの対話会とは隔世の感がある。ひとえに佐藤先生を初めとする八戸工大の先生方の教育指導の結実と理解した。SNW の対話会もこれからは工科系単科大学や高専の学生との対話会には、原子力産業界の協力会社の現役社員の方々にも対話に加わって頂くように、学校側と調整していく試みをして良いと感じた。

3. 5 第 5 G

(1) 対話概要 5 G 若杉和彦

参加者 計 9 名

学生： 5 名 内訳 工学部電気電子工学科 3 年 1 名、機械工学科 4 年 4 名
OB・地元企業： 2 名 (株)ジェイテック、青森日揮プランテック(株) 各 1 名
シニア： 2 名 若杉和彦 矢野歳和

対話概要

参加者各自の自己紹介の後、機械工学科 4 年の学生がファシリテータになり、学生からの質問をもとに主として以下の項目について対話した。

・放射性廃棄物の処分地問題

(質問) 放射性廃棄物の処分地問題がいま話題になっている。日本は火山や地震が多いが、処分する場所はあるのか?

(回答) 低レベル廃棄物については六ヶ所に処分場所があり、既に事業を進めているし、今後も十分余裕はある。高レベル廃棄物については国から埋設可能な場所を示す資料等が出ているが、多くの国民の否定的な意見があるので、まだ処分地は決まっていない。ただ高レベル廃棄物は全体の量が大きくないので、数キロメートル四方の土地で十分収容できる。また、海外では北欧で既に廃棄事業を開始している国もあり、処理処分の技術は既に確立されている。

・太陽光や風力等の再エネの問題点

(質問) 最近太陽光や風力による発電が目立っているが、問題もあるように聞いている。原子力発電と比べてどんなことが問題になっているのか?

(回答) 太陽光や風力は天候に左右されて不安定だ。稼働率は場所にもよるが太陽光が約 12%、風力は約 20%と言われている。太陽光では 10 倍くらいの設備を作らないと 1 の発電ができないことになる。要するに効率が悪くて設備容量を大きくする必要があるし、送電線建設等の課題もある。また、これらの電力を一般国民に使ってもらうために、“再エネ賦課金”として昨年だけでも 2.4 兆円を各家庭から徴収している。これらの再エネはまだ経済的に自立していない。

- 日本のエネルギー政策

(質問) 日本の原子力政策について知りたい。どのようになっているのか？また、世界の原子力政策はどうなっているのか？

(回答) 今の日本のエネルギー基本計画では 2030 年に原子力発電を全電力の 20~22%としているが、それを達成する具体的な道筋が明確でない。今停止中の原発を再稼働させることや新規増設も必要になるが、今の世論の状況では大変難しい。特に原発の稼働年数を 40 年としたままでは 2030 年以降も運転できる原発が急速に少なくなる。これらを見据えた実現可能な将来対策を考えていく必要がある。また、世界の主要な流れは原発利用の方向である。特に隣の中国では 20 基程度の原発を現在建設中である。ドイツなどは再エネを積極的に導入しているが、EU 内でもこの電気代が最も高くなっている。ドイツはフランスの原発でできた電力を買ったり、自国の余った再エネの電力を隣国に売ったりしており、地政学的に日本とは違うことを認識すべきだ。

- 満点の（欠陥のない）発電方法はないのか？

(質問) 発電方式にいろいろ問題があることが分かった。欠陥のない、満点の発電方法はないものか？

(回答) 火力、水力、原子力、再エネともに完全無欠ではなくそれぞれ利害得失がある。火力は CO2 を出すし、海外からの燃料代があるので高価になる。水力については、国内に大型ダムを建設できる場所がもうない。再エネは不安定だし、現代的に自立していない。原子力の場合は、国民の受容性問題がある。特に中高年層に原発嫌いの多いのは、学校で放射線や原子力を学んでこなかったため、とにかく怖い感情が先に立っている。ただ、最近は学校でも放射線を教えるようになってきたので、だんだん事情は変わると思われる。将来は核融合のような技術も期待されるが、それは君たち若者の仕事になり、大いに期待している。

- 就職後の仕事について

(質問) 会社に入ってからどんな仕事があるのか？どんな心構えが必要なのか先輩から聞きたい。

(回答) OB 参加者から、放射線管理の仕事等、今まで経験してきた内容について説明した。また、シニアから、一般的なことではあるが、与えられた仕事は確実にこなすこと、放射線取扱主任者等の資格は可能な限り積極的に取得すること、友達を沢山作ること、英語はしっかり勉強すること等をアドバイスした。

(2) 感想 5G 若杉和彦

対話会ではシニア2人で第5グループを担当して、5名の学生と2名のOBと原子力に関する種々の話題について話し合った。各自の自己紹介の後、ファシリテータの役を引き受けると積極的に手を挙げた学生がおり、彼に任せたがそつなく役をこなすことができた。やはり近く社会に出る学生的心情の中には、反原子力世論の中で原子力は将来どうなるのだろうかとの危惧が見え隠れしていたように思う。最近の米国とイラン間の抗争に見る如く、日本のエネルギー安全保障には問題点が多々あり、エネルギー基本計画実現や地球温暖化対策のためにも原子力の役割が将来は必須であることを対話の中に織り交ぜて話をした。学生は熱心に聞いていたので理解はされたと思うが、各自自分の中で咀嚼して自分の意見として発言できるまでになってほしいと願っている。

今回の企画では、前夜の学校側の関係者とシニアの懇親会、対話会当日午前中の青森量子科学センターの見学、対話会のための事前の学生質問の準備、学生のグループ分け、近隣企業からの八戸工大OBの参加等々、大変お世話になり、佐藤教授他複数の学校側関係者の皆様に心から感謝申し上げたい。次回の対話会をさらに効果的にするため、可能なら八戸と六ヶ所間のバス移動時間を利用して、シニアによる原子力諸問題の解説や学生とのQ&Aのスペースを設けると良いのではないかと思います。

(3) 感想 5G 矢野歳和

学生にとって原子力発電所の再稼働と高レベル廃棄物の処分地の決定が、ともに進んでいない現状からくる一抹の不安があり、一方でマスコミに主導された情報弱者が多数を占める社会に押される形で、再エネ楽観主義にも袖を引かれる思いがあり、不安定な心情が一部にある。しかし八戸工業大学の原子力関連プログラムを選択し、六ヶ所村や大間など下北地区でのインターンシップや研修を通じて原子力への理解は深まっている。それに加えて、六ヶ所村や近辺に就職先を自分の意思で選択していることにより、地域貢献も含めて職業として覚悟の上で原子力を選択し、自分の未来を探して築こうとしている。学生は、長期間を社会で働いてきたシニアと対話することに加えて、自分たちが現在学んでいる大学の出身で六ヶ所村にて働いている若きOBと、OBが所属する企業の経営者や管理職を含めて対話グループを構成することは興味ある組み合わせだ。つまり学生・シニア・OB／企業の視点の異なる3者が多角的に質疑応答しながら個々の考え方を展開することは、流動的な学生生活から一步進んで、自分で選んだ就職先の下北地区で働こうとする若者にとっては極めて有意義であったと思う。

4. 講評 阿部勝憲

今回の八戸工大対話会企画は非常に有意義と感じました。企画の特徴は、学生諸君とシニアに加えて地元企業メンバーを加えたこと、テーマを原子力の仕事としたこと、実施場所を原子力の拠点六ヶ所としたことでした。原子力の仕事のこれまでとこれからについて、地域における自分の仕事としてとらえて活発な意見交換ができたと思います。対話会のねらいは立派に果たされたと思います。

研修で地域の原子力事業や研究開発の現場を体験的に学んだと思いますが、今回は我々

も放射線利用の医療分野などの最先端について見聞することができました。青森県は原子力の二本柱のエネルギー利用では日本の拠点で、一方の放射線利用もいよいよこれからです。皆さんにはぜひ地域の原子力の仕事に誇りをもって、わが国のエネルギー源確保と地域への貢献の担い手になるよう期待しております。

5. 全体まとめ 矢野歳和

今回の対話会は昨年にも引き続いて、八戸から六ヶ所村に移動して、学生とシニアの対話会の範疇から拡大して、六ヶ所村で働く八戸工業大学のOBと彼らが所属する企業の役員や指導層クラスの方々にも参加して頂き、多角的な対話会となりました。

高橋實氏の基調講演ではエネルギー政策には原子力が必要不可欠であるとの構成が明瞭で、そこから原子力には短期中期長期の視点からどんな仕事があるか、学生には何を期待するかを明確に示した。この基調講演方式は対話に入る前の認識を共有するとの観点から、非常に優れた方式であることを再認識した。

各対話のグループでは、グループの人員構成により個性的な展開が行われ、事前質問に対する回答から開始し、そこから一步踏み出す試みも行われた。学生やシニアに加えて、六ヶ所村の企業で働く大学OBとその企業の経営者も参加するという3者による対話は、スリリングで新しい試みで意義があった。対話の時間を長くすることや、極く短時間でも全グループの発表が望ましいことなど改善点があるが、対話終了後の各グループの報告、各自の感想、講評およびアンケートの結果から判断すると、得られた成果は広範で多岐にわたりかつ充実しており、成功だったといえる。

なお、対話会に先立ちプログラムの一環として2017年に開設された青森県量子科学センターを見学した。六ヶ所村を含めて青森県では、放射線利用などの多くの分野で原子力関連の産業を総合的に取組んでいることに心強い印象を受けた。

最後にお世話になりました佐藤学教授をはじめ大学の教職員の方々、学生の皆さんおよびOB・地元企業の方々に深く御礼を申し上げます。

以上

IV. アンケート結果とまとめ

担当:大塔容弘

八戸工業大学対話会(令和2年1月17日)の事後アンケート結果は、対話会終了後に収集したアンケートを、記載内容の原文のまま取りまとめた。

1. 対象

回答者数：33名（男性31名、女性2名）

内、学生26名（男性25名、女性1名）

一般人7名（男性6名、女性1名）

学生の専攻：理系(原子力) 2名

理系(非原子力) 21名

文系(教育) 0名

文系(その他) 1名

無回答 2名

学生の希望進路：就職(電力)7名

(複数回答可) 就職(原子力メーカー)10名

就職(メーカー) 4名

就職(研究機関) 0名

就職(教育機関) 1名

進学 0名

無回答 6名

2. アンケート結果

(1) 講演の結果は満足 of いくものでしたか？その理由は？

・とても満足した 25 (75.8%) ・ある程度満足した 7 (21.2%) ・やや不満 0

・大いに不満だ 0 ・無回答 1 (3.0%)

理由：

- ・様々な話を聴く良い機会となった。
- ・日本のエネルギー政策の中における原子力立場がわかりやすかった。
- ・知らないことを知ることができた。
- ・自分で考えていた事に不足した成分を身につけられた。
- ・自分は原子力系、電力系に絞り進路について考えていましたが、たくさんの事を聞くことができました。
- ・グラフや図などでわかりやすい講演だった。
- ・新しい事を聞き知ることができた。
- ・学生さんにとっては、原子力の必要性等がまとまっているので良かった。
- ・分かりやすいスライドでとても良かった。

- ・新しい発見があった。
- ・知らないこと自分たちが知るべきことを教えてもらえた。
- ・既知の内容であったが、分かりやすくまとまっていた。
- ・資料が見やすく纏まっていたのでわかりやすかった。
- ・自分の気になっていた事の他に、様々な疑問を理解する事ができた。
- ・原子力業界で働く先輩方やベテランの方々の意見を聴くことができた。
- ・これからの日本のエネルギー問題について知ることができた。
- ・原子力での仕事の中部について良く知った。
- ・いままで浅かった知識を深く知ることができた。
- ・就職に当たってとても参考になったが、時間がやや足りなかった。
- ・珍しい話を聞かせて頂いた。
- ・とても面白かった。
- ・原子力の今の立ち位置を知った。
- ・原子力について数値を見ながら詳しく話をきくことができた。
- ・エネルギーのこれからについての問題についてしれたこと。
- ・原子力の知識を増やせた。
- ・日本のエネルギー政策を知った。
- ・対話時間や距離が近く濃い時間をすごせた。
- ・今までの知らなかった内容を聞くことができた。

(2) 対話の内容は満足 of いくものでしたか？その理由は？

- ・とても満足した 23 (69.7%) ・ある程度満足した 7 (21.2%)
- ・やや不満だ 2 (6.1%) ・大いに不満だ 0 ・無回答 1 (3.0%)

理由：

- ・就職するにあたって、貴重な内容をお話ししてくださった。
- ・学生たちに自分の経験を伝えることができた。
- ・互いに意見をだしあい話し合うことでいろいろ考えることができた。
- ・本大学に勤務されていた阿部先生や、石塚先生、山口さん、阿部さん、横濱さんの話がためになった。
- ・学生が原子力について、自らの職業として考えていることがわかった。
- ・現場で働いていらっしゃる方々から、身の引き締まる話を頂けた。
- ・就活前にたくさんのアドバイスをいただいた。
- ・長年、原子力にたずさわっている方々の目線の話の聴くことができた。
- ・楽しく知識を深められた。
- ・学生さんの意見がもっとでてくれれば良かったと思う。
- ・分からないことが詳しく聞けて良かった。
- ・質問内容や調べものをして聞けない内容を知ることができた。
- ・質問した内容をすべて分かりやすく資料をもとに応えてもらえた。

- ・学生の知りたい事が分かり興味深かった。
- ・混乱し過ぎて自分の考えを自分の言葉で表現できなかった。
- ・企業参加者の役割が明確になっていないと思います。
- ・質問した事以外の深い話をして下さり、理解する事ができた。
- ・原子力の現状や今後の方針についてなど詳しく聞くことができた。
- ・原子力関係にかかわってきた人から話を聞くことができた。
- ・対話で直接話をする事により、よく知った。
- ・実際に働く方々の意見を聞くことで現場の実態を知った。
- ・少々お話が長引く場面が多かった。
- ・興味深い話だった。
- ・興味ある内容で、聞いていて納得のいくものがあった。
- ・自分の就職する会社の社長と対話することができた。
- ・思っている質問ができ大それたものでも細かい答がありためになった。
- ・去年の対話より自分自身の知識が増えていたので良かった。
- ・原子力の安全についてたくさん話を聞いた。
- ・疑問に思うことを聞き理解が深まった。
- ・自分が疑問に思っていた事についての解答を聞いた。

(3) 事前に聞きたいと思っていたことは聞けましたか？

- ・十分きくことができた 27 (81.8%)
- ・あまり聞けなかった 1 (3.0%)
- ・全く聞けなかった 0
- ・無回答 5 (15.2%)

意見：

- ・今後の人材確保や教育に向けての大切なことを聞けて良かった。
- ・自分が思っている事よりもさらに十分分かった。

(4) 今回の対話で得られたことは何ですか？(複数回答も可)

- ① 新しい知見が得られた。 25 (62.5%)
- ② 自分の将来の進路の参考になった。 8 (20.0%)
- ③ 教育指導の参考になった。 1 (2.5%)
- ④ 特に新しい知見は得られなかった。 1 (2.5%)
- ⑤ その他 2 (5.0%)
意見…働く姿勢、やりがいを初めから求めるな！
意見…若い学生さんと意見交換でき、楽しいひとときを得られた。
- ⑥ 無回答 3 (7.5%)

(5)「学生とシニアの対話」の必要性についてどのように感じますか？その理由は？

・非常にある 29(87.9%) ・ややある 3(9.1%) ・あまりない 0 ・全くない 1(3.0%)

理由：

- ・ありがたいお話を聴けた。
- ・知識、経験を聞くことにより今後の生活に活かせると感じた。
- ・たくさん経験してきた方から話をうかがえることはすごくためになる。
- ・学生は安全とかやりがい、信頼と簡単に口を出すのが、実際の経験からシニアの発言は重みと説得力が違うから。
- ・若い人の最前線にいる学生と社会人が意見を交わえる。
- ・経験してきたものが違うため、新たな視点から発見する事ができる。
- ・企業、学生、シニアの3者の意見交換、就活アドバイスが聞けた為、必要である。
- ・良い刺激になると感じる。
- ・シニアの方の目線の話がとてもためになると思う。
- ・経験したことはとてもきちょうな話になっていた。
- ・若い世代に対して原子力の意識付け、将来の人材確保につながると思う。
- ・自分にはない知識が得られる。
- ・原発や再処理工場に対する認識が変わった。
- ・長い間原子力に関わってこられた人達の話しを聞くことができる。
- ・世代間の意識を知ることができる。
- ・経験に勝るものはない。学生側の気持ち次第。
- ・学生の疑問に対しシニアとOBの考えを聞ける場は大切だと感じた。
- ・これから働いていくにあたっての参考になった。
- ・メディアでは知ることのできないことを知ることができた。
- ・直に仕事をしている人との対話をえることでより深く知った。
- ・疑問をうやむやではなくしっかり理解させてくれた。
- ・体験談などはやはり知りたい。
- ・学生の身で知れない知見が多くある。
- ・普段体験できない話を聞けた。
- ・原子力に興味がなくとも興味深い話が聞ける。
- ・普段聞けない話が聞ける。
- ・就職した身のある人たちで人生のけいけんが豊富で人生を新たな視点で臨めると感じたから。
- ・原子力関係だけでなく、社会の知識を学ぶことができた。
- ・まちがった情報をうけいれている私たちに正しい知識と情報を教えてくれた。
- ・経験者や実際に行っている人の話を聞くことで知識をえられた。
- ・実際に経験した話は、とても興味深かった。

(6) 今後、機会があれば再度シニアとの対話に参加したいと思いますか？

- ・まだまだ話したりないので参加したい 4 (12.1%)
- ・もっと知識を増やしてから参加したい 25 (75.8%)
- ・十分話ができたらもういい 1 (3.0%)
- ・二度も必要ないと思うからもういい 0
- ・その他 1 (3.0%)

意見…これから若い人の育成の力になればうれしい。

- ・無回答 2 (6.1%)

(7) 放射線、放射能に対してどのようなイメージを持っていますか？

① 放射線、放射能はやはり怖い。 1 (3.0%)

② 一定のレベルまでは恐れる必要はないと以前から知っていた。
19 (57.6%)

③ 一定のレベルまでは恐れる必要がないことを講演、対話から理解できた。
11 (33.3%)

管理すれば安全との書き込み有。

④ 無回答 2 (6.1%)

(8) 日本のエネルギー政策では、原子力発電を基幹電力(2030年に発電量の20～22%)とし、可能な限り削減していくとされています。対話も含めてあなたの認識は次のどれですか？その理由は？

① 原子力発電の必要性を強く認識した。削減又は撤退すべきでない。 14 (42.4%)

② 原子力発電の必要性は分かっていたので、対話の前後で認識は変わらなかった。
17 (51.5%)

③ 原子力発電の必要性は分かるがやはり危ないから早期に削減又は撤退すべきだ。
0

④ 原子力発電を止め、再生可能エネルギーを最大限使えばよい。 0

⑤ その他 1 (3.0%)

⑥ 無回答 1 (3.0%)

理由：

- ① ・化石燃料が輸入まかせなので、日本国内で自給できるエネルギーが必要。
- ・エネルギー安全保障上の要請。実績ある発電方法である。
- ・原子力発電は各社(強力会社)がしっかりと安全対策をしていれば、大丈夫であり、エネルギー不足も解消される。
- ・エネルギーがすくない国だから。
- ・発電コストや安全性を考えても必要だと感じた。
- ・世界中でCO₂削減をかけた火力発電が減っていく中、火力を代替できる原子力だから。

- ・メリットのほうが多いと考えて。
- ・街中にもコストと危険性が排除できればいいような気がする。
 - ・温室効果ガスを 80%削減のためには発電所は不可欠。
- ② ・再生可能エネルギーでは基幹電力になり得ない。
 - ・輸入まかせなので日本で自給できるエネルギーが必要だと思った。
 - ・強制するのではなく、地道な歩みを見せる事が大切と気づく事ができた。
 - ・原子力発電の必要性は十分あると思う。
 - ・安定した電力を得るためには原子力は必要だと思った。
 - ・原子力が無ければ、日本の電力問題がさらに悪化する。
 - ・再生可能・火力だけでは発電量が少ないので、地球温暖化も考えると必要だと思う。
 - ・原子力は日本にとって必要で止めるような事はあつてはならないと思う。
 - ・原子力に変わる代案が無い。
 - ・原子力発電の便利が良い。
 - ・原子力発電法がすぐれている。
 - ・正しく使用し、自然災害さえ無ければ生活をしていく上で必要である。
- ⑤ ・どちらでもかまわない。

(9) 本企画を通して全体の感想・意見などがあれば自由に書いてください。

- ・貴重なお話、ありがとうございました。
- ・たくさんアドバイスや意見、対話してくれてありがとうございました。
- ・初めての参加をさせて頂きました。4月からの就職に向け、今一度身を引き締めて励んで参ります。有難う御座いました。
- ・満足できました。またこのような機会があれば幸いです。もう一度お願いします。また、事前質問の2つ目をさせて頂きましたが、たくさん学ぶことができました。その他たくさん質問させて頂き就活前にたくさんアドバイスいただきありがとうございました。
- ・もう少し専門分野での話を実際に伝えてあげたかったと感じた。しかし、私にとっては知識を有するとともに良い機会であった。
- ・知らないこと、知りたいことが分かりやすく細かくくぐだいて説明してもらえたのでとても楽しい時間でした。
- ・シニアの方と、OBの方の考えをどちらも聞くことができる場として、今後も続けていきたいと思った。深い話を聞くことができ、入社する前に理解を深めることができたので、いい機会だった。
- ・2時間があつという間に感じるほど聞き入った。気を付けるべきこと、心構えなどが学べて良かった。
- ・意義のある会だったと思う。
- ・原子力があるリスクより原子力が無いリスクの方が高いと感じた。

- ・体験や対話を通して知識をえることができた。
- ・今回の対話会は、原子力関係の仕事に就く自分にとって、いろんな知識を学ぶことが出来たのでとても良かった。

3. まとめと感想

- ・一般参加者は日本原燃の社員を始め全てが原子力産業関係者であった。当然のこととして、彼らは原子力に対して理解がある。従って、原子力に対して多少の不安を感じるとの回答があれば、それは学生の回答と考えると差し支えなかろう。そのような視点に立ってアンケート結果を以下にまとめた。
- ・講演に対する満足度は、申し分のないものであった。講演者高橋實氏のご苦勞が報われて本当に良かったと考える。
- ・講演のみならず、その後のグルー内でのシニアや一般参加者との対話の中で、講演内容に係わる話題が取り上げられ、対話を通して原子力に対する理解を更に深めることができたという理由の文章から読み取れる。
- ・対話内容についても大半が満足のものであったとの回答であったが、一部にやや不満足な回答があった。
- ・学生から、混乱過ぎて自分の考えを自分の言葉で表現できなかった、との理由が述べられている。少ない時間の中でテキパキと進行しなければならない事情故に、立ち止まって考える余裕を与えることができない背景があったものと推察されるが、今後検討の余地があるものと思う。
- ・一般参加者から、企業参加者の役割が明確になっていないと思う、との理由が述べられている。八戸工大OB以外の一般参加者への参加呼びかけは、おそらく大学からなされたであろうから、来年も同様に参加を呼びかけるのであれば、企業参加者の立ち位置に関し事前に大学側と打ち合わせる必要があると考える。
- ・事前に聞きたいと思っていたことを聞けたかの問に対して、一人を除き十分聞くことができたとの回答であった。
- ・推測の域をでないが、聞きたいことはしっかりシニアに聞きなさいと、事前に佐藤教授から学生達にアドバイスがあったのではないかと推察される。なお、あまり聞けなかったとの回答を寄せた学生の理由は不明である。
- ・今回の対話会を通じて得られたものは何かとの問いに対し、全員の学生は得られたものがあったとの回答であった。対話会の効用が明白に表れている。ただ、一人の学生から、働く姿勢、やりがいを初めから求めるな！との意見が寄せられた。根っからの企業人であるシニアが若い人に求める期待が、上から目線の要求に見られたのかもしれないと感じた。
- ・学生とシニアの対話会の必要性をどのように感じているかの問いに対し、一人の学生を除き全員がその必要性を認めている。必要性を認めている学生達の理由を読むと、今後学生達が社会に出て活動を開始する上で、対話会から得るものは生半可でないとの印象を持った。これからも対話会を存続する意義を再認識した次第である。

- ・なお、必要性を認めないとした学生の理由を読む限り、何故不必要なのか理解できない内容であった。
- ・機会があれば再度シニアとの対話会に参加する意思はあるかとの問いに対し、大半が再度の参加を希望している。対話会の存在意義は、上述したことに尽きるのではないか。
- ・放射線、放射能に対するイメージに関する問いに対し、学生達の多くは不安感を持っていないことが理解できた。今回の講演やシニアとの対話を通じて、怖いものであるが必要以上に恐れる必要がないことを改めて理解できたことは良かったと思う。
- ・日本のエネルギー政策に対する認識の問いに対し、学生の全員から原子力発電の必要性を認識しているとの回答を得られた。原子力発電施設と原子燃料サイクル施設が立地する青森県下北半島の付け根に設置する工業大学の学生たちが、日本のエネルギー政策における原子力発電の重要性をしっかりと受け止めているという現実に関し、頼もしい限りと感じた次第である。
- ・最後に、今回の対話会に参加して感じた感想・意見を自由にもらったが、アンケート取りまとめのシニア担当として、肩の荷が下りてホットする感想・意見であった。
- ・ただ一般参加者のOBから、もう少し専門分野での話を実際に伝えてあげたかったと感じた、との意見が寄せられた。六ヶ所の再処理工場で働くOBとして、現場の作業の実態を手取るように伝えたかったのではないか。そのような機会を作ることができなかったのは、本当に残念で申し訳なかったと反省している次第である。

以上